

私たちの知らない『野寄』 - 大正から平成、野寄の歴史と私の記憶 ?井史郎さん(八〇歳代)

著者	?井 史郎, 佃 悠生, 甲南大学久保ゼミ, 久保 はるか
雑誌名	「大学周辺地域の歴史を知る」シリーズ
巻	1
ページ	28-34
発行年	2017-05
URL	http://doi.org/10.14990/00002915

大正から平成、野寄の歴史と私の記憶

高井史郎さん（八〇歳代）

一 懐かしい野寄

昔、野寄近辺の人々は住吉川を利用して素麵を作ったり、御影石を採取して加工したり、また、六甲山麓では数多くの水車が連なり、それ等を生業にしていた。後に、海沿いでは酒造業が発達し、そういう産業からんだ仕事が多かった。野寄は比較的恵まれた場所であつたと聞いている。今の西岡本三丁目付近には、鉄工所、交番、料理屋、寿司屋、理髪店、路地に入ると銭湯、その先にはカフエが、と活気に溢れていた。夏には、夜店が出るほどにぎやかだった。銭湯の帰りにカフエに寄る。カフエにはアップル水、ミルクコーヒー、サイダー、かき氷に色のついたシロップをかけて楽しんだ。夕方には道路に水を撒き、床几台を持ち出して、世間話をしたり、花火を楽しんだりした。そんな時間が夜中まで続いた。

私は、昭和一一年生まれで物心つく五歳くらいから戦争が始まり、生活が大変厳しくなつて、こうした風景も段々と様変わりした。にぎやかだった店も減り、密であつた住民同士の交流も薄れ、それまでは、隣保で米を借りたり、味噌を借りたり、そうした親密な日常生活の環境が崩壊してしまつた。戦災から逃れるために疎開をする人もあり、生活模様の一変してしまつた。子供の頃は、「あの人はあそこに住んでいる人や。何処から嫁に来た人で、ご主人は何処へ勤めておられて、子供は何人いるか。」みんな分かっていた。それがもう全く分からなくなつた。にぎやかな場所であつたのが、年月が過ぎて今の姿になつた。当時を振り返る時、何故そんなににぎやかでかつたのか、子供であつた私にはよく分からない。しかし、大正から昭和の初期には、野寄はそんな華やかなところでもあつた。

から野寄のお墓の辺りまでの広さがあり、上女中、下女中が一〇〇人ぐらい働いていたそうだ。灘高校の辺りには、火力発電所があり、馬場遊園地には子供の電車が走り、小動物園、桃畑、西瓜畑が点在し、屋敷内では松露も採れたそう。私の父は、その発電所の助手を勤めながら電気工事の商店を開業した。

少し経った頃、房之助氏の東京への転宅が決まり、その息子さんが一緒に行こうと父を誘ってもらった。乳兄弟であったから誘ってくれたらしいが、それを断って、そのまま祖父も父も久原家とは段々疎遠になった。疎遠になってしまったが、一途に思っていた祖父は、自分の危篤時、房之助氏から元気にしているかと電話があったと耳元で言った時、はっと目を開けた。起き上がるとうとした。身も心も入れて務めていたのでだろう。当時、奉公することに対して一生懸命であった祖父だと思ふ。

大金持ちは、一体どういった生活を送っていたのだろうか。こんな話を聞いたことがある。あの時代には、まだ冷房装置は無く、夏はとて暑かった。房之助氏は、母のために山から水を床下に導き、その冷気を座敷の四隅の簀の子から吹き出るよう、仕掛けを作った。まさに自然が作る冷房だ。大変大掛かりでお金もかかる

が、あの時代にそのようなことが出来た。今、世界中で貧富の差が問題になっているけれど、当時ほどのような思いで大金持ちを見ていたのか、少し気になってしまう。貧富の差どころでない、アメリカンドリームでないけれど、そんなことが日本であった時代がある。久原邸では、村民に屋敷を開放し、宴遊会を開いたり、昭和初期に野寄村へだんじりを寄付したり、また、村に眼病が流行した時、村内の数か所に井戸を掘って村民の衛生について心配したり、何故そこまで村に、その住民に、久原氏が貢献したのか。私は世代が違うから想像がつかない。財閥のお屋敷があったことで、たくさんの雇用が生まれた。そして、野寄地区が潤ったのも事実のようだ。

三 戦争と野寄

戦争時は、久原邸の跡地に川崎重工の典型的な二階建ての木造の社宅が規則正しく並んで建っていた。それを目掛けてR29(注：米軍の爆撃機の名)が焼夷弾を落とすにきた。多く建っていた社宅は全焼し、焼夷弾が風で煽られて近隣の家まで焼けてしまった。私は、空襲警報が鳴ると阪急の線路の下の隧道に身を潜めてじっと飛行機が通り過ぎるのを待っていた。当時は、どの家も深さ六〇センチメートルほどの防火用の水槽をモルタル



高井さん 11月30日撮影



大正時代の久原橋と久原邸 (甲南学園所蔵)



久原邸から二葉荘を望む (甲南学園所蔵)

二 久原房之助と祖父

大正の始め頃、久原房之助(注：久原財閥の創始者)という人が、大阪から野寄の地へ屋敷を移した(注：現在のオーキッドコートの前)。ちなみに、平生鈇三郎氏が甲南大学を創設する時に協力したのも久原氏であった。祖父は、久原氏の屋敷をまとめるという役に就いていた。房之助氏の息子さんと父は、乳兄弟であった。だから、房之助氏との関係については、祖父母からよく聞いていた。そのころについて、ああ昔そういうことがあったんだということを時々思い出している。

房之助氏は、藤田男爵の甥にあたる人で、奥さんは平野の有馬道の祇園さん(注：平野祇園神社。平清盛が福原に住んでいた頃、祇園神社で大輪田泊の構想を練ったという)の真下におられた田村市郎さん宅の娘さんが久原家へ嫁いでこられた。房之助氏は、叔父である藤田男爵の銅鉦山へ番頭として勤めていた時、藤田男爵が、もうこの山はあまり鉦石がでないから閉山する、と決めたので、番頭をしていた房之助が「それなら私に譲ってほしい。」と頼んで、銅鉦山を譲り受けた。その後、岩盤が崩れて銅鉦脈が露出した。それが久原財閥(注：現在の日産、日立、JXの源)の始まりであった。久原家の屋敷は大きく、今の灘高校の辺り

で作り、その水をすくい、火を消すというのが使命だった（注：消火訓練。当時、避難訓練よりも、空襲による火災をバケツリレーで消火する訓練が行われた。）。学校では授業中、空襲警報が鳴れば、みんな自分の荷物を持って家に帰ってしまおう。空襲警報解除の声が聞こえれば、また学校へ行く。席に着くと、隣にいたクラスメイトがいない。誰かが空襲で死んだ。話はそれで終わる。今であれば血の気が引くかもしれないが、当時はもう慣れてしまっている。だから、焼夷弾が落ちて亡くなってしまっている人が横にあっても見向きもしない。

野寄には、焼夷弾が落ちてきたが、国道二号線から南側は、石綿工場や、帆布工場、飛行機を作っている川西航空機等、町工場がたくさんあった。こういうところへは焼夷弾ではなく、爆弾による空襲と使い分けているようだ。甲南市場付近では、爆弾が落ちた跡に一五メートルくらいの孔が点々とあった。そこに元々あった建物や土は、どこへ飛んだか分からない。どのようにして作ったのかと思うほど、綺麗なすり鉢状だった。

焼夷弾は、長さ六〇センチメートルくらいの六角状の筒にゼリー状の油が入っており、その先に着火した布状の帯が付いていて、落下すると油に引火して爆発する。そして、一〇メートル

ル四方に弾ける。それ故に、木造家屋は全て焼けてしまった。バケツで水をすくい、持つて行つたとしても、それは何の役にも立たない。ましてや、自分の身を守ることが最優先であるから、防空壕の中で身を隠していた。空襲警報が解除されて、外に出る時には既に辺りは燃えてしまっている。

グラマン（注：米軍の戦闘機の名）に襲われたこともあった。焼夷弾を積んだ飛行機が先に来て、空襲警報が解除されたのを見計らって、次にグラマンがやってくる。それから人を襲う。動く白いものが標的にされているから、白いシャツを着ていると狙われる。私は、国道二号線の住吉川の橋の下へ逃げ込み助かった。撃たれた痕跡には湯気が出ていた。

神戸には、三回ほど空襲があった。本山第二小学校は、一学年百数人であったけれど、その間に四、五人亡くなった。友達が亡くなったから悲しんでどうか、思い出してどうか、そのような余裕は全くない。人間性が亡くなってしまっている。本当に寂しい悲しい時代であった。二度とあってはならない経験である。

四 阪神淡路大震災と野寄

震災の時も戦争当時と同様で、二、三人亡くなっても、「あの人死亡したって。」と他人事のようにだったが、言葉を交わした人や子供たちの姿を思い出すと、今から始まる永い幸せな人生があったことだろうと胸が痛む。

地震から三日くらい経った時に、「あの人がこの人だったかな。」と出勤のタイミングで会えば会釈する程度の関係だった男性を思い出した。家は崩れている。声をかけても当然ながら返事はない。消防を呼び、搜索すると、男性が横になって寝ていた。でも、その時既に息を失っていた。が、まだ体温は残っていた。もう早く気が付けば、親しくお隣同士の付き合いをしていれば助かったのかもしれない。近所の付き合いも大事だとつくづく思った。

遺体は、安置所に集められていた。この辺りは、魚崎の小学校が安置所になっていた。教室に行ったら遺体がいっぱいと並べられている。四〇体数えて、あとは数えられなかった。三日に一度くらい検死というものがあって、この人は窒息で亡くなった、この人は出血で亡くなった、など検視官の医師が死因を特定しない限りその人は死んだことにはならない。火葬もできない。

その後、死亡診断証明書をくれる。それを持つて区役所へ行けば火葬証明書をもらえる。その火葬証明書があれば、日本国内の何処の火葬場へ行っても火葬してもらえる。しかし、この辺りの火葬場は、二日くらい並んで待つ予約がパンク状態にあった。

その後、私は救出しても御棺がないことに気が付いた。急遽ベニヤ板で御棺を作ろうとしたが、これが難しい。寸法をいくらにすればいいのか分からない。三〇センチメートルでいいのか四〇センチメートルでいいのか分からない。なので、火葬場に知人を通じて確かめたが、「大きくしたら入らへんで。」という一言だけだった。震災が起きれば、どんなことが起こるか分からない。難しい思いもする。

本山第二小学校が避難場所になった。京都三重方面から応援に来た人たちは食料をトラックに積んで支援に来られた。野寄は、比較的六甲山に近いから、六甲越えであればこの辺りの渋滞した道路を通らなくても来ることが出来る。だから、トラックで応援に来てくれる人が多かった。改めて人の情に手を合わせる。

今でもお盆に墓で知り合いに会えば、「生きていたらな、こんな年になつていたな。」と話をする。亡くなった人には気の毒で、言葉が無い。まさに災難そのものだ。

しすぎる気もする。今となつては、懐かしさで物言うんじゃないに、野寄をもう少しにぎやかにすることができたらいいなと思う。何か手掛かりを求め、方法を考えることができれば、もう少し野寄を活性化させられるんじゃないか。村をもう少しにぎやかにさせられるんじゃないかと思う。野寄大日神社の広い場所で土俵を作つて、子供が相撲をとつていような、お祭りを開いて、屋台があつて、にぎやかにすれば楽しいのに。でも、それは今はもう夢物語かもしれない。だから、互いに隣の人が何をしておられるのか、何人家族の家庭なのかぐらいは分かるような、せめてそんな温かい野寄になつたらいいなと願う。

取材日 二〇一六年 一月三〇日

編集 佃悠生



大日女尊神社（おおひるめのみことじんじや）

五 だんじりと野寄

昭和二〇年頃、戦時中にだんじりは焼けてしまった。野寄には、石工や牛に酒米を積んで運ぶ馬力引き等、力仕事をする人が多かった。だから、野寄のだんじりは、比較的大きく重いものだった。しかし、それが無くなってしまった。昭和二五年のときに、本山村は神戸市と合併した。神戸市は、我々は同じ市民だということで、花電車を飾って一体感をアピールした。我々はそれに応えるため、神戸市の港まつりに合わせて、トラックをベニヤ板で囲い、それに電飾したものを作つたこともあつた。

その当時、近隣地区のだんじりを借りて地区内を巡行していた。岡本にはだんじりがあつたことから、羨ましい気持ちもあつた。何とかしようとして、待望のだんじりを手に入れ、何度も手を加え、熱心な多くの人たちの努力があつて今の状態になった。皆がだんじりに憧れを持ち、思い入れが強かつたから、今のような野寄のだんじりができたのだと思う。

野寄のだんじりは、曳く人の人数が多い。と同時に平均年齢が若い。今の役職の人たちは、できるだけ若い人たちを中心に活動するようにしている。経験があるのが無かろうが、次世代

に繋ぐために、先輩の人たちは若い人を中心にだんじり祭りを盛り上げるようにしている。しかし、事故があつたら大変、締めるとは締める。これが野寄の特徴だと思う。

野寄では、今でもだんじりを引く人たちが溢れている。少々重いだんじりでも別にどうということはない。子供たちも多く、ロープも一本では足りないから、二本継いで参加意欲を汲み取る。ありがたい話だと思う。村中みんなが楽しみにしている。思い入れの強いだんじりを豪華にしたり、保存したりといったことに努力し、大事にしなければと力を入れていく。だんじりが無いときの寂しさが身に沁みているのか、愛着や思い入れが強い。だから、毎年盛大にだんじりを出すことができる。今となつては、焼けて寂しい思いをしたそのことも無ではなかつたとも思う。

六 最後に

子供のころを振り返れば、今の野寄は静かな住宅街だと思つてしまう。が、これは時代の流れである。八〇歳にもなつて、昔のことを思い出して懐かしんでいたって、まさに今、スピードの早い時代が流れているから、それはしつかり自分で心得て受け入れないといけない。それでも道路を通つて人がみんな知らん人ばかりやったら、寂